



下古沢・厚木市斎場前調整池のハス
(撮影：小林会員)

令和5年8月号 Vol. 232
(2023年)

発行：令和5年8月5日

あつぎ観光ボランティアガイド協会

ホームページ <http://atugikanvola.sakura.ne.jp>

メールアドレス atugikanvola@yahoo.co.jp

発行責任者 会長 田頭 文昭 編集担当者 澤田 正弘

《古民家岸邸の七夕飾り見学と近隣歴史探訪》

行事区分：会員研修

日時：7月15日(土) 9:40~12:20

場所：古民家岸邸～檜谷薬師堂～蟹殿洞々生誕地の碑～上荻野展望所～鳶尾展望所

参加者：会員12名

昔の桑畑から住宅地へ姿を変えた上荻野の一角に、不意に姿を現わす黒板壁、青々と茂るモチノキとスタジイに囲まれた薬医門、そしてその奥に建つ重厚な主屋。厚木市指定有形文化財である「古民家岸邸」です。

今日はこの岸邸から檜谷(ひのきやと)薬師堂、渡辺華山の游相日記にも記され、また本会 T 会員の祖先である蟹殿洞々(かにとのとうとう)の誕生地、そして明治14年、明治天皇が近衛兵訓練を閲兵された東谷戸及び鳶尾の天覧所を回りました。

岸邸では、長く管理に携わる N 会員より、裏話を含めた楽しいガイドをしていただきました。凝った意匠が施された欄間、神代杉を使った天井、幻想的な市松模様の赤色ガラスに様々な形のランプシェードなど、近代和風の主屋からは当時の大工職人、そして主の心意気が伝わってきます。

この岸邸からほど近い公民館内に安置された檜谷薬師堂、そして路傍で白い花をつけたヤブミョウガと共に並ぶ数体の石仏は、人々を見守るように建つその姿が印象的です。

＜洞々はここの人なり花の宿＞と刻まれた碑が建つ、江戸後期の俳人・蟹殿洞々の誕生地では、T 会員による洞々についてのガイドと共に、洞々が使ったといわれる肘掛も拝見することが出来ました。

そこから少し入った小高い斜面の、薄紫色のアキノタムラソウに囲まれた東谷戸の天覧所碑、上荻野の山々を眺めながら向かった最終目的地の鳶尾の天覧所碑では、明治天皇の行幸及び近衛兵訓練に関して S 会員が、また道々では草花の紹介を Y 会員がそれぞれ自主的に担われ、会員各々の「強み」が光る、楽しい研修となりました。(毛利 記)



古民家岸邸 薬医門

《懇親バーベキュー大会》

行事区分：懇親推進

日 時：7月27日（木）11：00～14：00

場 所：デジキューBBQ テラス（本厚木ミロード本館屋上）

参加者：会員14名

いやー！！久しぶりの観ボラ懇親会、思わず会計にお聞きしました。「なんで参加費がこんなに安いのか？このような施設を使うのでもう少し参加費を上げて良かったんじゃないの？」会計さんより「今までコロナ禍で久しぶりの懇親会なので予算的にも・・・」とのお話でした。（ありがたきご配慮！）

参加者からの差し入れも多々ありました。観ボラを愛する皆様のお気持ちでしょうか！



「この暑さの中、炭火の前にすわるのかあー。」ビアガーデンの方が良かったかなーとの声も聞こえてきました。確かに炭火の熱さから一部躊躇する場面もありましたが乾杯すると、あぁ不思議！皆さん炭火の前にしっかりと座って BBQ を楽しんでいるではありませんか！ アルコールで感覚が鈍くなったのでしょうか？これはシニアの特権だあー！それとも、差し入れで全員配布された扇子で扇いだお陰でしょうか。

久しぶりの懇親会なので皆の手作り感があっても良いのでは？！との声も聞かれましたが、観ボラシニアサークル（失礼！シニア手前の方もいらっしゃいました。）体力が無くなった面、ミロード屋上の手間いらずのBBQ 場を使うのも選択肢の一つでは！

とは言え、有志の差し入れで、紫蘇ジュースあり、ブランデー梅酒ありなど、手作り感も十分楽しむことが出来ました。一年毎に年を重ねるのは観ボラに限らず人間避けて通れない宿命！気力は参加者全員健在であることが確認！いや実証（集合写真の笑顔）できたBBQ 懇親会でした。次回も是非！！（成田 記）





《法界寺と二つの学校》

阿部 啓冊

荻野にある法界寺は、北条氏直に命じられた荻野郷の地頭松田康長が造立したお寺で、秀吉の小田原攻めにより、かつての繁栄を失ってしまったと伝えられていますが、今でも堂々とした佇まいを見せる浄土宗のお寺で明治期に県央教育界に大きな足跡を残しています。

明治5年、政府は教育の近代化を目指し「学制」を發布します。これにより県央でも寺子屋や静学館（妻田村）、成思館（厚木町）のような郷学校、荻野山中藩の藩校興讓館（荻野村）が廃止され尋常小学校を設立します。当初は低かった就学率は「小学校令」が公布され尋常小学校への就学が義務となったことにより向上。明治40年の全国就学率は男子98%、女子96%になったといえます。



下荻野 法界寺

現在、厚木、清川、愛川には30校ほどの公立小学校がありますが、いずれの小学校もその起源を辿っていくと、この時代に創立された尋常小学校にたどりつくことができます。

明治中期になると教育の関心は中等教育へと移り、明治19年には普通教育の普及を目指した「中学校令」が公布され、明治35年に県立第三中学校（現在の厚木高）が南毛利村に設立されています。

ちなみに、県立第一中は現在の希望が丘高（横浜市旭区）、県立第二中は小田原高です。

この令は普通教育の普及に重きをおいていたため、実業教育の普及については停滞を招いてしまったといわれています。そのような時期に曾我明随は自らが住職を勤める法界寺に私塾を開き若者たちの実業教育に取り組んでいました。

明治26年に政府も近代産業の発達を促すため「実業補習学校規定」を公布します。愛甲郡長であった国松栄太郎は実業教育の必要性を訴えており、明治39年2月に法界寺の私塾も愛甲郡立実業補習学校として認可を受けることができました。ただ、この「令」には「実業学校においては男女を混同することを得ず」という一文があったため、法界寺の私塾は男子部と女子部に分離され、明治40年4月から男子は法界寺に設けられた郡立第一農業補習学校で学びました。男子部が郡立第一農業補習学校と呼ばれたのは玉川村小野に第二農業補習学校、田代に第三農業補習学校が設立されたことによります。女子は及川村に移築されていた荻野山中藩の藩校興讓館の建物を臨時校舎として裁縫を中心に学んだそうです。三年後、男子部は郡立高等実業補習学校、女子部は郡立女子実業補習学校と改称、その一年後、さらにそれぞれ郡立高等実業学校と郡立実業女学校となり、その少し前に開設された第三中学校を加え県央には中等、実業、女子との三分野の教育機関が揃ったこととなります。

法界寺から始まった二つの学校はその後どうなったか少し見てみることにします。

「愛甲郡立高等実業学校」

法界寺を出て及川に教室を開設、大正 6 年に修業年数を 3 年に延長し校名も郡立農業学校と改め農業技術の習得を目指しています。手狭となった校舎を下荻野に移転するために生徒たちは桑畑を掘り起こすなど労働奉仕をしながら学んでいたといいます。この努力もあって 1 年後の大正 7 年に教室 3 室を持つ校舎が落成。校舎の裏にある畑の半分は桑園、残りに園芸作物を作り、教室以外に養豚舎、鶏舎、蚕室や温室を設け農業を学ぶために必要な環境を整えたといいます。しかし郡制が廃止されたときに運営を県に移管ができず、学校は資金不足に陥り廃校の窮地に立たされてしまいます。

農業後継者への教育が途絶えることを心配した郡内の 10 村（荻野、三田、妻田、及川、林、棚沢、下川入、小鮎、依知、愛川）が学校組合を設立したことで、学校組合立愛甲農業学校として存続することができました。

関東大震災では校舎が被災したそうですが、火災で焼失した女学校から焼け残ったバラックを移築し教育を継続しています。そのほかにも養蚕業の衰退、農業不況による運営資金の不足など厳しい教育環境にさらされ続けますが、昭和 11 年に念願の県立移管が適い神奈川県立愛甲農業学校として教育活動を続けます。

実習用農地も借地で手狭であったこともあり、建物の老朽化が著しくなった昭和 22 年に相模原町上鶴間にあった旧陸軍東部 88 部隊跡地に移転し、県立愛甲農業高等学校として歩み始め、移転後の跡地には睦合中学校が設立されました。ところが、愛甲農業高が移転した 2 年後には在日米軍の住居不足を解消するため土地の明け渡しを求められてしまいます。



県立中央農業高等学校（海老名市）

窮地に陥った愛甲農業高を支援したのは海老名にあった県蚕業試験場と厚木高でした。県蚕業試験場は蚕室を事務所と校長室に提供し、厚木高は寄宿舍に住んでいた人を移動させて、教室として提供したので、何とか分校が開設されています。農高の教員は授業のため海老名の蚕業試験場にある職員室と厚木高に設けた分校の間を自転車で行き来したといいます。

昭和 27 年になり「神奈川県立愛甲農業高等学校建設促進委員会」から寄付された県蚕業試験場近くの海老名市中新田の土地に校舎を新築、昭和 40 年には県立中央農業高等学校として新たな道に踏み出しました。

「愛甲郡立実業女学校」

女子部は修業年数 3 年、本科 70 名の他に専科 20 名、研究科 10 名を定員として認可されており、初年度は 1 年生 20 名、2 年生 15 名でスタートしています。大正 2 年には校舎を厚木町に移転、翌年には校名を郡立実科高等女学校に改称して本科 170 名、選科 30 名として歩み始めます。学校では裁縫と学科が半々、国語、算術、体操などの学科では第三中学校の教員が出張して教鞭を取ったそうです。

遠方から通う生徒や寄宿舍から通う生徒もいた学校生活は意外と楽しいものであったようです。初期の卒業生からは遠足で厚木から舟で相模川を下り平塚に出て汽車や馬車で大磯や横浜に出かけたことや東京のデパートめぐりが思い出として語られており、授業が終

わるとテニスやピンポンを楽しみ、草履、はかま姿でフットボールを行った話も残っています。

昭和 22 年に新しい学制が施行されると、その翌年には県立厚木女子高等学校と改称し昼間定時制を新設、さらに夜間定時制も設置し校名を県立厚木東高等学校へと改称しています。東の名称は、校舎が現在、厚木小学校のある場所であったため、厚木高の東ということにつけられたようですが、昭和 41 年に王子の現在地に移転したことで厚木高校と東西の位置関係は逆転してしまいました。



王子 厚木東高等学校

移転するときには、夜間通学を行っていた定時制の生徒にとっては通学による負担が重くなるということで旧校舎に分校を開設しています。分校は後に独立し厚木南高校となりますが、夜間部に通う生徒の年齢はかなり幅広く、第一回の入学者では 16 歳から 27 歳まで在学したそうです。このため、修学旅行では旅館で引率の教員と間違われたというエピソードなども残っているようです。

その厚木東高も来年には隣接する厚木商業高と統合され、厚木王子高等学校として新たな 100 年に向かって一步を踏み出します。

明治時代に法界寺住職である曾我明随が若者たちの明るい未来を願って開設した私塾は幾多の困難を乗り越え、それぞれの道を歩む二つの学校となり、今も県央地区の教育を支え続けています。少し長くなりましたが、厚木王子高校の開校を目前に控え、法界寺で始まった私塾の現在までの歩みを振り返ってみました。

主な参考文献：夢はるか（厚木東高等学校 創立百周年記念誌）
中央農百年史（中央農業高等学校）

恩曾川で見つけたお花 撮影：編集担当



ムラサキツメクサ
(赤クローバー)



ワルナスビ
(牧野富太郎博士が命名した。環境省の要注意外来生物リストに指定されている)

最近の活動

日付	場所	内容	参加者
7月 8日	アミューあつぎ	定例会	会員 25名
7月 8日	アミューあつぎ	会員研修（厚木の文化財）	会員 22名
7月 15日	荻野地区	会員研修（古民家岸邸他を巡る）	会員 12名
7月 27日	本厚木ミロード	懇親バーベキュー大会	会員 14名
7月 31日	相川公民館	編集会議	会員 3名

編集後記

暑い日が続いています。世界気象機関（WMO）は7月の世界の平均気温が観測史上最も高くなることが確実になると発表しました。こんな暑さの中、7月27日に4年ぶりに懇親バーベキュー大会が開催されました。会場が駅ビルの屋上なので、いざとなれば全館冷房のエリアに逃げ込めるという安心感もありました。楽しく飲み食いし、会員同士の交流が出来たことで、今後の活動でのチームワークに役立つ事が期待できます。

編集委員 阿部 啓冊 小林 直樹 澤田 正弘